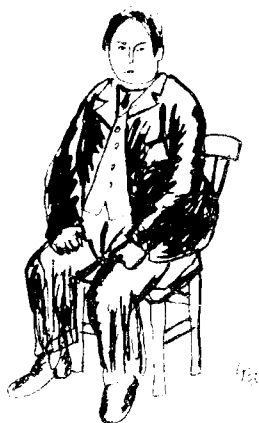


姣童

今東光



講談社版

© 1969

TÔKÔ KON

第1刷 昭和44年4月20日

定価450円

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は

お取替え致します

日本音楽著作権協

会出認第433822号

姦童

著者 今東光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

振替東京3930

電話東京(942)1111(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

姣

(こうご)

童

裝釘意匠
風
間
完

第一章

小石川茗荷谷の伯父の家を出た、と言えは聞えは好いが実は態よく出されたというのが本音だろう。

「永々、御厄介になりました」

人力車が来たので柳行李ひとつを股の間にはさんで蹴込みに乗せてから挨拶すると、この半白の伯父はにっこりと笑いながら猫撫で声を出しやがった。

「まあな。町家で暮すのも好い勉強さ。しっかりやりなさい」
ぷッ。

この伯父は僕の母の姉、すなわち伯母の連れ合いで、母方の祖母の表現をかりれば「奸譎な男」として親類の中で通っていたのだ。彼は津輕藩に生れ、函館戦争には矢不來の合戦で衆にぬきん出て功名を樹てたということになっているが、親類中で誰も目撃した奴がないから反駁する

ことが出来ないままに今や伝説化しているのである。函館の五稜郭ごりやうかくにたてこもる榎本武揚の幕府敗残兵を攻めるのに官軍は海陸からした。函館港を軍艦が攻める間、大島圭介のひきいる幕軍を薩長は津軽軍を先頭にして攻めた。馬鹿正直な津軽軍は天朝様の御ためと矢不來の難攻不拔の塞にむかって肉弾戦を展開したのだ。多くの戦死傷者を出し、数十時間の悪戦苦闘で矢不來の堅陣を打破したのに、この伯父が身にかすり傷もなく手柄を樹てたという伝説は僕には承服しかねたのだ。

彼は津軽藩命によって薩摩鹿兒島に開設された西郷隆盛の私学校に留学させられ、一カ年の勉強を終えて帰国し、間もなく西南戦争が勃発するやたとえ逆賊とはいえ恩師に弓を曳くために警視庁に採用され、一躍、警部として従軍し、肥後の熊本城を攻めている薩軍と一戦を交えた。当時、巡查を拝命するものは諸藩の浪人が多く、この士族隊を引率して彼は田原坂たはらさかの一戦にも参加したそうだ。熊本鎮台将兵の善戦振りは晩酌の話題の種になったもんだ。

「熊本鎮台の百姓兵なんぞ鎧袖かいろそで一触ぞと勢い込んで攻めかかった私学校の兵児たちも、案に相違のていたらくさ。訓練というものは恐ろしいもんで鎮台の兵隊はよく戦ったよ」

しかしながら伯父は彼等が肥後侍だということを忘れているのだ。南北朝を通じて肥後の菊池一族の逞しさは伝説として熊本兵に受け継がれているのだ。若し薩軍参謀が熊本鎮台を避けて日向路を辿り、そこから四国に侵入していたら長期持久戦にも充分に堪えただろうと思う。そのうちに諸国の不満な浪人等が各地に兵を挙げていたら明治維新もどうなっていたか知れたもんじゃない。

彼が警部として警視庁で羽振りの好い時、藩侯に請われて津軽家の三太夫となり、終生、殿様の側近として安穩な生涯を送った。何しろ平生、殿様の御機嫌を奉伺しているのだから人あたり

が柔かで、猫撫で声で応対し、決して怒った顔を見せたことがない。その伯父が僕の母に宛てた手紙に、

「東吾こと生来、嘘つきにて屢々、外泊すれどもその真を語らず、これでは監督不行届の次第にて到底、御世話を致しかね候」と書いたものだ。

誰が遊びに行つて泊つて来たあげく、女郎買い致しましたと眞実を喋る馬鹿があるか。

僕は母から伯父の手紙の転送を受けると直ぐこの家を出る決心をしたのだ。僕は今まで嘘つきと言われたことがない。嘘が上手につければ学校を二つも三つも退校になる筈がないのだ。あんまり嘘をつくのが下手だったから失敗したのだと思つてゐる矢先、この陰險な伯父から嘘つき呼ばわりされて腹が立った。

（二度とこんな家へ来るか——）

と肚の中でばやきながらキリシタン坂から伝通院の通りに出た。

そう言えば、それつきり、伯父が死ぬまで遂に僕は彼の門をくぐらなかつた。

しかしながら今から思えばこの伯父は多少、顔真卿流の書をたしなみ、漢詩なども作つたりした点で、幾分か話が合ったものだ。僕は、

「生意氣ですが僕は懷素が好きで」

と言つと、

「ほう。狂草とまで絶賛された懷素は凡人が真似ることが出来ない芸だよ」

と伯父は落胆するように言つたもんだが、僕が伯父の家を出るに臨んで誰の詩句か知らないが半切に書いて贈つて呉れた。

陋巷一生顔氏ノ樂

清風千古伯夷ノ貧

もとより文学か絵で身を立てようと思つたからには陋巷に朽ち果てるのも厭われないが、どうも芸術家というと清貧に甘んじていると言わんばかりの世間の眼には抵抗を感じずにはいられない。おのれ等は権力を持つて金殿玉楼に住みながら、こちらには虚名だけ与えて貧乏に満足しろとはふざけた言い分ではあるまいか。折角の伯父の教訓も、伯夷のように蔵^{くらひ}ばかり食つて餓死する氣もないし顔回^{がんかい}のように空の瓢箪を叩いて楽しむ氣もない僕は、この記念の書もいつの間にか失つてしまったように思う。

僕の借りた家は本郷宮永町何番地かだったが、実は神田明神脇の妻恋坂の坂下の陰湿な一区画、その灰色のどん底に建っている三階建の木造家で、家の主というのはまったくの叩き大工。女房と子供二人で乳呑兒もいるという五人暮しの世帯で、三階の屋根裏、つまり物置の三畳を借り受けたのだ。

ところがこの家に引越して間もなく母から一片の通告を受けた。というののはかりそめにも伯父の家を出るのに作法を欠いているのは怪しからん。従つて伯父の手前、一応、勘当にしたというのだ。解つたような解らない理屈だ。伯父こそ僕を嘘つき呼ばわりして表面は至極おだやかに僕を追ん出しておきながら、母の方は伯父に対する手前上といえ勘当とは、ちと聞えぬと思つたが、一旦言い出したからには容易にわかつてもらえない母親の性格を想うと、ここは黙つて勘当になるのが上分別と思惟したことである。

(さあ。これからが大変——)

家からの送金の路が絶たれると明日から食つてはいけない。糞いまいましいと思つたが途方に

くれたのも事実だった。

ふらりと浅草へ行った。

吾妻橋の欄干に凭れて河面を眺めていると、ぽとぽとと音立てて一銭蒸汽が綾瀬の方から下ってくる。それが両国の傍の發着場に着く頃には、柳橋の酒亭には紅燈が輝いて粋な音締めが洩れようというもの。真赤な夕日が大川端に沈んで今戸あたりの別荘、たしか長田とかいった数寄屋造りの一画は今に忘れ難い風流な今戸寮の面影を存していた。指の爪を噛みながら考えに耽ったが好い智恵が浮ぶはずもなかった。懷手をして戻ってくると東橋亭のあたりから太棹の音が流れて娘義太夫の甲高い声が幽かに耳に聴えてくるのだ。親兄弟に見放された勘当の身には今宵のさわりが殊のほか身につまされる。忠兵衛ではないが羽織が肩からずっこけるのも忘れるほど惚れた女でもあれば、よしや勘当になっても苦にはならないが、伯父の家を氣儘に追ん出たのが不可いという理由で勘当になって、明日からの食扶持を独りで探さなければならぬとは割に合わない勘当と言わなければならない。

その晩は家に戻る気もしなかったので浅草の観音堂の縁の下にもぐり込んだ。傍を見ると藁蓆をかぶった奴が寝ているかと思うと、老夫婦の乞食みたいな奴がぼそぼそと何か語り合っているし、僕は座禅を組むようにして暗がりの中にいた。

何時間経ったかわからない。

遊冶郎みたいな奴が潰し島田の芸者とべちゃくちやと喋りながら通り過ぎる後から、蓬髪垢頭といった淫売婦が野良犬のように男をつけ廻している。次第に夜が更けるに従って喧嘩する奴、女を囁う奴、女にひっぱたかれて逃げ出す奴、まったく浮世絵とはこのことだ。

僕はいつの間にか眠ったようだ。

「裏の裏が明ると感じて目を覚ますと、僕はまぎれもなく観音堂の縁の下に寝ていたのだ。埃をはたいて飛び出すと、恰度、浅草寺貫主の上堂の時だった。紫の素絹に緋紋白の大五条をかけ、赤い台傘をさしかけた下で静かに伝法院の脇門から衆僧をひきつれて歩いて来る。眉白老僧だった。」

「お上りイ……」

という呼び声に堂脇の扉のところで若い僧侶等が敬屈していた。その間を通して貫主は御宝前に進み、やがて法華懺法がはじまった。伝えられるところによると慈覚大師円仁が唐から帰朝して移入した礼拝様式だそうで、じつと御堂の太い柱に凭れて聴き入っていると、

「ボサバカサ……」

という言葉がひどく耳ざわりに聞えるのだ。これは菩薩摩訶薩というのを漢音で唱えるので果ては「坊さん馬鹿さ」と耳に響いてくるのであった。

懺法の時間は長い。かれこれ二時間ちかくもおつとめをしている。虚子は「風流懺法」を比叡山の横川に泊って書いたと聞いているが、あのような奥比叡の山中で聞く懺法は心も静まるだろうが、家を放り出された僕には懺法どころの騒ぎではないのだ。勘当の身とはいえ懺悔の気分になっていないのだから是非もない。

その足で今戸に行き、まだ僅かに残っている今戸焼の窯場のあたりを徘徊した。佗びしい店頭は今戸焼の数が陳列してあって、埃をかぶった硝子ケースの中に如何にも下手物の陶器が売れ残っているのだ。そこの婆さんをつかまえて今戸焼の話をして見たが老女は何も知らないのだ。

裏の窯場から運んでくるのを売っているだけで彼女の返辞は、

「てんで売れねえよ」

の一語に尽きた。

「ひでえもんだね」

「まったくだよ。売れ残りの女郎と同じで、どうも仕様もねえわさ」と来たもんだ。

そう言えば足の冷たい馴染女郎を想い出したが、彼女も売れ残りの因縁で僕の敵娼をつとめたわけで、かく御沈落しては今戸の窯場あたりをうろつくばかり。指呼するほどの距離にありながらその女郎にさえ会えない。

一日中、六区の公園で時間を潰して空き腹を抱えながら夜更けの山谷堀をとぼとぼと歩いた。行き先は言わずと知れた仲ノ町だ。大門にはまだ植え代えた見返り柳があった。明治四十何年かの大火で柳も火にかかって枯死したが、代りの柳が植えられて何年経ったことか。衣紋坂の甃を過ぎると矢張り見返り柳がなくては吉原にならないのだろう。福地桜痴居士の対聯（柱などにかける対句）を鑄込んだ青銅の大門をくぐり、江戸一の露地を曲った角から三軒目。金玉楼という紺暖簾をくぐると顔見知りの妓夫太郎が、

「オヤ。お珍しい。お独りでがんすか」

まるで廻るような口調だ。

「いつも一人じゃねえか」

「へ……」

と額を叩いて笑っていやがる。誰かにおごられて来るものとばかり思い込んでいたので、こんなやくだいもないことをぬかすのだ。

「夕顔さんでしたね」

と言った下から、

「ええ。夕顔さあん……」

隣り近所へ聞えよがしの胴間声だ。それほどの客ではないが、ともかくやりて婆と一緒に夕顔の部屋に通った。やりて婆が引込むと、

「おい。今夜は銭なしだ。委細は後で話すが、頼んだぜ」と厚顔ましく言った。

「ふん。いつも銭あったことなんてなかったじゃないの。仕様がなね。今夜つきりよ」

「好いとも」

妓に達引かせて、どっかりと床に身体を横えると何とも知れない疲れがどっと出た。勘当の手紙をもらった途端から独り角力をしているようなもので、観音堂の縁の下で一夜を明したのが却って寝苦しかったのか疲労困憊してしまった。

「どうしたのさ。髭もあたらないで」

長火鉢に片肘をついて朱羅宇の烟管で紫の烟りをふかしながら妓は言った。夕顔という源氏名は風流だが、年の頃なら二十五六、潰し島田に水色疋田縮緬の掛けをだらりとかけ、長襦袢に黒襦子の打掛けを肩から滑り落ちそうにひっかけ、少し険のある細面をこちらにむけてたずねた。表を流す新内は尾上伊太八の一節らしい。

「昨日、おれは勘当をくらっちゃった」

「へえ。今時めずらしいわ。勘当だちてき。そんなら銚子へ行きゃ好いじゃないの」

「銚子まで行く錢もねえんで、昨夜は観音さまの縁の下で御厄介になってよ。うっかり乞食娘と抱き寝するところだったよ」

「馬鹿だねえ。あたいのところに来れば好いのに」

「だから今夜来たじゃねえか」

「それで働くつもりなの」

「今、職探し中よ」

「何かあるの」

「さっぱりさ」

「お前さんじゃねえだろうねえ。腕に職がねえもの」

「われながらあされたよ。その代りもう当分、お前さんの御厄介にならねえだろうと思う。食扶持へらしてまで女郎買いは出来ねえもんな」

「じゃあ、さ。月に一度逢いに来なよ。あたしが始末してあげるから」

「銭なしでもかあ」

「ああ。好いとも。あたいの年期が明けるまでつきあってあげるよ」

僕はこの年増女郎の寛大な氣持に切なくなつた。赤の他人でさえ袖摺り合つた因縁をかくまでにしてくれるのに、血を分けた母親が身寄りもない大都会に放り出すとは、どういう量見だろうと怨めしく考えずにはいられなかつた。

夕顔は登楼した時、銭なし僕にうんざりした顔を見せたが勘当と聞いてから態度が變つた。こういう浮き川竹の社会に生きる妓は妙に哀れな男に同情する癖がある。男が自分のために尾羽^{おは}打ち枯らしたと錯覚するのであろうか。それとも社会の屑同士のような同情を寄せるのであろうか。

「お腹すいたんだらう」

「もの言うのも億劫なくれえさ」

「もう、ちょっと待ちな」

引け過ぎ（午前二時）ちかい頃、裨襠かいどろを脱ぎ捨てた夕顔は部屋を飛び出して行つたかと思うと間もなく、高足膳を運んで来た。

「ほら、ごらん。鰯ぶりの刺身だよ。天婦羅もあるし。鯛のうしお煮だよ。玉子の厚焼きは東吾ちゃんのお好物だろう。これは鰻汁うなぎじゅうだよ。これ、精がつくんだってさ」

「どうしたんでえ」

「お客様の台ノ物の残りを集めて来たのさ。小母さんが厭な顔してたけど小遣やったら黙って渡してくれたよ。あの糞婆くそばときたら慾深のうるさ型かたまりって奴さ」

僕は床から起き上ると、まるでかぶりつくようにして先ず鰻汁をすすった。味噌汁に鰻の香が移つて、鰻のにつちやりとする歯ごたえが何とも言えない。あの小さな貝の肉をにちやにちやと噛みながら一息に味噌汁を吸つてしまった。生の好い鰯の刺身もうまかつたし、鯛のうしお煮は結構ずくめ、天婦羅の銀ぼうは申し分がなかった。殊に好物の玉子の厚焼きはとろりとした甘味が舌の上で融けて、ごくりと吞みくだすのが惜しいくらい。最近これほどの御馳走にありつたことのなかった僕は、何所どこの何奴どいつか知らないが台ノ物を取り寄せて一杯やりながら、お職女郎の膝枕でごたくを並べている奴の面おもてが見たいと思つたことである。

「うまかつたぜ、ごつつあんでした」

と叮嚀ていねいに頭を下げると夕顔は、

「まだ御馳走ごちそういうのは早いよ」

「何故なぜさ」

「床つけてから言いなよ」

と言つてくすくす笑うのである。

夕顔はするりと長襦袢を脱ぐと僕の左側にすべり込んで来、自分でしゅっしゅっと音立てながら伊達巻をといた。そして冷たい足を僕の股間に割り込ませ、

「当分、会えないんだねえ」

と頬を摺り合せてくるのであった。

夕顔との出会いも奇妙であつた。画学生の悪童二人と三人づれで、それも引け過ぎ近くなつて金玉楼の前を通ると、仲間の一人を知っていた牛太郎が無理無体に三人をあげてしまった。一人には前に買った妓があり、他の一人は写真で見立てた妓を買うことになつたのだが、その時になつて僕にあたる妓がないのだ。小籬こまぎの金玉楼はせいぜい六七人の妓が居るきりで僕はあふれてしまった。他に客のある妓も欲しくないし、無理に遊びたい妓も無いので僕は、

「俺は帰るぜ」

と立ち上つた時、小母さんが、

「病院から退院して来た妓こが居るんだけど、どうオ。尤もつとも楼うちじゃ一番の年増だけど、それで我慢しておくれよ」

今さら引け過ぎの佻たうびしい吉原から帰るのも情なかつたので、

「何でも好いや」

と言つて逢つたのが夕顔だった。たしかに僕より年上だった。

「よく、あたいで我慢しておくれだったね」

「我慢したんじゃないねえ。お前にめぐり会う運命だったんだらうぜ」

「おや。嬉しいこと言つておくれだね」

「いつ退院したの」

「一昨日」

「まだ客を取らねえのか」

「そう。もう十日以上も男に抱かれてないわ。こんな商売していると変なものね。一晚も男の肌に触れないと何だか物足らないんだよ。病室にいたある大籬の華魁さんだけど、その妓も言ってたわ。病院の若いお医者を見ても興奮するんだってさ」

「ふうん。そんなもんかね」

「そうよ。男にやわからないかもしれないけど、女の身体ってそんなもんよ。習慣かもしれないけど一晚も男無しに寝るのはやりきれないわ。邪険にしないでね」

初会の夜、はからずも夕顔の述懐を聞いて、この妓は面白いと思った。その夜は妓の方から挑んで来、自分で堪能するまで遊び戯れたのである。

もう夜明けに近かったかもしれない。

吉原という歴史の中で華麗と汚濁と肉臭の廓が、まったく閑として物音をひそめるのは引け過ぎから夜明けまでの一瞬だ。此所の妓らはその時刻を逢う魔が刻と呼んでいくくらいで、刃に伏した心中者の呻き声が壁を透して聞えてくるのもその時刻なのだ。

「当分、会えないんだらうけれど、今から何日ぐらい経ったら来てくれるの」

「さあね」

「どうして」

「職を見つけたらな」

「何の仕事をするのさ」